

ウトナイト沼の冬の水鳥類

北海道で見られる鳥の種類数は多いが、一年中生息している留鳥はその約半分である。あとはほとんど夏鳥か、渡りの途中に通過する旅鳥である。冬鳥もいるが、その種類数は非常に少ない。そのため冬には留鳥だけとなって、本州以南の地方とくらべると、鳥の種類数はいちじるしく少なくなる。また雪がつもるので、すみ場所として不適となる場所も多くなる。たとえば、農耕地や幼令造林地のように大きな木のないところでは、冬の間、鳥類がまったくいなくなってしまうこともある。

したがって冬に多くの鳥類が生息できる場所は、鳥類の保護・管理上きわめて重要である。このような場所の一つとして、ウトナイト沼がある。ここは冬でも湖面の一部が凍結しないので、多くの水鳥類が集まる場所である。

私たちは一九六七年以来、日本鳥類保護連盟の依頼により、冬の鳥類を観察してきた(鳥獣保護事業基本調査として)。この観察は今後もつづく予定であるが、一応これまで五年間の記録をまとめてみて、この鳥類の大略を知ることができた。一九六七年十月から翌年三月までの記録は、本誌第四号に報告してあるが、その後の観察記録も加えて、ウトナイト沼の冬の水鳥類についても紹介し、鳥類のすみ場所としてのウト

ナイト沼、およびその周辺の湿地の重要性について述べてみたい。

五年間に三五回の観察を行ない、その間に記録した鳥類は六五種である。そのうち水鳥類はオオハクチョウ、ガン、カモ、アイサなど二四種、ワシ・タカ類はオジロワシ、トビなど八種であった(詳しくは、日本鳥学会誌「鳥」に報告するので、他の鳥類についてはそちらを参照していただきたい)。表一にこれらの名と生息期間を示す。

▽ハクチョウ類△

オオハクチョウがウトナイト沼に渡来するのは十一月になってからであるが、まれに十月下旬のこともある。数は、渡来しはじめの頃に少ないのもちろんであるが、十二月まであまり多くならない。その後次第に増え、二月下旬から三月中旬にかけては二〇〇〜三〇〇羽となり、そのシーズンの最高となる。それからは次第に少なくなると、四月中旬までには、まったく見られなくなる。

湖面は十二月中旬から三月中旬まで凍るが、美々川の流入・流出地点付近は凍結しないので、オオハクチョウはここに集まって採餌する。

ハクチョウはオオハクチョウの群に混じって渡来するが、数は少ない。ウトナイト

沼では、三月と十二月に数羽が見られただけである。

ハクチョウ類の越冬地は、北海道に数か所あるが、中央部ではこのウトナイト沼だけであろう。

▽ガン類△

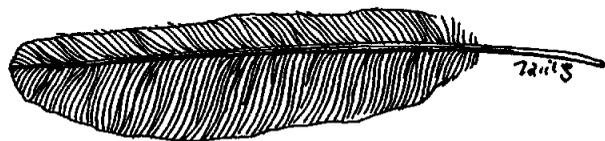
ここではヒシクイとマガンの二種が記録された。マガンは非常に少なく、三月に一度見られただけである。ヒシクイは三月には比較的多く、数十羽から百数十羽の群がよく見られる。これまでの最大の群は一八〇羽であった。このときはヨシ原の中にいて数えられなかったヒシクイがかなりいたので、実際の数はもっと多かつたはずである。

これらは北への渡りの途中に寄つたものである。ガン類の北上ルートとなる石狩平野には大小の多くの沼が散在しているが、ウトナイト沼のようにガン類の休息地となるところはないようである。

ガン類は、おもに南側のヨシ原の中や岸近くで休んだり、採餌している。湖の中でもこの地帯以外のところにはおりないようである。

▽カモ類△

水鳥類の中でもっとも多いのがカモ類で



一〇種が記録された。その数も多く、十月

には湖面に見られるものだけでも二、〇〇〇羽近くになることもあり、まわりのヨシ

原の中で休んでいるものも加えると、その数は相当多くなろう。カモ類の中で数の多い種はマガモ、カルガモ、ヒドリガモ、オナガガモである。

カモ類の数は、十月以後次第に減り、一月になって氷がはりつめる頃になると、種類数も個体数も非常に少なくなる。北海道で繁殖したカモ類、またもつと北からやってくるカモ類も、ほとんど本州以南で越冬するわけである。しかし、ウトナイト沼ではまったくなくなつてしまふわけではなく、マガモ、ヒドリガモ、ホオジロガモの三種は、数は少なくなるが、残っている。そして三月になると、再び数が増える。

ウトナイト沼は、このようにカモ類が秋に南下し、春に北上するときの休息地となつているだけでなく、一部のカモ類の越冬地ともなっている。

マガモやカルガモのように、前半身だけを水中につこんで餌をとる、淡水ガモ類は、主としてヨシ原の近くにいます。このように、湖南側一帯は、カモ類の採餌にとつても好適な場所となつている。一方、キンクロハジロやホオジロガモのように水中にもぐつて採餌する海ガモ類は、湖の中央部

にもいる。

▼アイサ類▲

ウトナイト沼にはアイサ類三種が渡来する。このうちミコアイサとカワアイサは、普通に見られる。後者は、これまであまり多くない種類であるといわれていたが、ここには冬中ずっと生息しており、ときどき数十〜百数十羽の群で現われる。また、普通は海にいるウミアイサが観察されたことがある。

▼その他の水鳥類▲

秋と春の渡りの時期には、少数のシギ類が飛来する。これらは、湖岸の砂地などで見られる。

また普通は海に生息するヒメウ、カモメ類がまれに見られることがある。ウトナイト沼は、大平洋沿岸からわずかに七キロメートルの距離にあるので、これらの海鳥が飛んでくるのであろう。

▼ワシ・タカ類▲

ワシ・タカ類の個体数はそれほど多くないが、種類数は比較的多い。このうちオジロワシとトビはよく見られ、冬中ここに生息しているようである。ここにいるオジロワシは、他の鳥類を捕食することはない、

氷上や樹上で休んでいることが多い。一度だけ、小型のカモを捕え、地上で食べていたことがあるだけである。

千歳市駒里（ウトナイト沼の北方約二二キロメートル）にある千歳市食肉処理センターのまわりには、ワシ・タカ類、カラス類が集まってきて、処理センターから出るごみをあさっている。小山政弘氏の観察によるとトビが約二〇〇羽、オジロワシが一〇羽近くいるという。これらのうち一部分がウトナイト沼に飛んでくると思われる。

このほか、表一にあげたように六種のワシ・タカ類が観察され、中にはオオワシのように、この地域では珍しい種類も飛来することがある。

▼まとめ▲

ウトナイト沼には、秋と春の渡りの時期に多くの水鳥類が渡来する。また冬でも湖の一部分が凍結しないので、オオハクチョウや数種のカモ類がここで越冬する。ワシ、タカ類ではオジロワシ、トビがいる。

このようにウトナイト沼は、冬期間これらの鳥類の休息地または採餌場所となつている。北海道の中央部には、ウトナイト沼に匹敵する場所はほかにないであろう。さらに、湖の周囲にある林で見られる鳥類も加えると、種類数は六五である。一般に冬の

表 1 10月～3月におけるウトナイト沼
の水鳥、ワシタカ類
の分布

種名	月					
	10	11	12	1	2	3
カハ	+	+				
ヒ	+	+				
マ						+
ハ						+
オ						+
ハ						+
マ						+
カ						+
コ						+
ヨ						+
ヒ						+
オ						+
ホ						+
キ						+
ス						+
ホ						+
ミ						+
ウ						+
カ						+
ミ						+
ト						+
オ						+
ノ						+
ク						+
チ						+
ハ						+
ツ						+
ク						+
シ						+
ロ						+
オ						+
セ						+
グ						+
モ						+

北海道では、種類数は極端に少なくなる。たとえば、札幌市藻岩山で私たちが観察した鳥類は七一種であるが、そのうち十一月から三月の間に見られたのはわずか二三種であった。このような事実とくらべてみれば、ウトナイト沼とその周辺の鳥相が非常に豊富であることは明らかである。

ウトナイト沼の重要性を強調するため、夏の鳥類についても少しふれておきたい。夏の観察は、これまでに数回しか行なっていないが、湖周辺の湿地でオオシシギ、ノゴマ、ノビタキ、オオジュリン、シマアオシ、マキノセンニュウ、ベニマシコなど、

ことを確認している。また、苫小牧市明野にはアオサギのコロニーがあって、ウトナイト沼周辺の湿地が、この鳥の採餌場所となつていくことはよく知られている。

現在、ウトナイト沼とその周辺の湿地をふくむ五一〇ヘクタールが鳥獣保護区に指定されている。しかしそれ以外の湿地は、苫小牧地区が工業地帯化されるにしたがつて、最近どんどん埋め立てられている。このことは、湿地を利用する鳥類のすみ場所をうばうことになる。事実、ウトナイト沼周辺のアオサギの巣が一九六三年には九八個だったのが、一九七一年には二九個に減つたという(自然保護通信3)。

またウトナイト沼の周囲に築堤の計画があると聞いている。これが実現すれば、ここに生息する水鳥類にいろいろの影響を与えるであろう。まず考えられるのは、一部の鳥類の採餌条件が変化することである。ハクチョウ類、ガン類、マガモなどの淡水カモ類は、前半身を水中につっこみ、さかだちして餌をとるので、水の浅い湖周囲のヨシ原近くでしか採餌できない。この湖で多くのオオハクチョウ、カモ類が越冬できるのは、単に湖面の一部が凍らないというだけではなく、湖の東、南側に広がるヨシ原付近の水面がよい採餌場となつているためであろう。ここに堤ができれば、湖とま

わりのヨシ原がはっきり区分されたり、水位の変化など、水鳥類の採餌条件に与える影響は決して小さいものではない。

ウトナイト沼から石狩平野をぬけて北に向うコースが、ガン・カモ類の断の北上ルートとなつている。このうちガン類の休息場に適したところは、ウトナイト沼以外に見あたらない。この湖がガン類の休息、採餌に不適になるとすれば、渡り途中の中継点が失われることになり、さらに北上ルートという線が失われることになりかねない。

以上にのべたように、ウトナイト沼とその周囲の湿地は、多くの鳥類の採餌場、休息場、営巣地として非常に貴重な存在である。かつて石狩平野、勇払平野に広大な面積を占めていた湿地が著しく少なくなり、鳥類のすみ場所が失われている現在、この地域の重要性はますます大きくなつてきているのである。

今後、この地域の開発はさらに進められるであろうが、それらがもたらすであろう結果をよく検討し、適切な処置をとる必要がある。とくにウトナイ鳥獣保護区を中心とする地域については、そのことを強調したい。

(国立林業試験場・北大農学部応用動物学教室)